

どんざのジャケットや産着など

（国後島出身の佐藤 明子さん）

佐藤明子さんは国後島泊村に住み、お父さんの正彦さん、お母さんの萩さん、長女の明子さんを含むきょうだい三人、祖父母の七人家族で、お父さんは郵便局に勤めていました。

終戦当時、明子さんは四歳でした。お父さんの実のお母さんである文さんは二十五歳で亡くなっておりお爺さんはその後再婚されています。

ソ連軍が島に上陸してきたことは回覧版で知り、船をチャーターして根室まで脱出しました。お父さんとお爺さんは、女性と子供を先に脱出させたいという想いで島に残り、明子さんやきょうだい、お母さん、お婆さんを先に島から送り出したそうです。



このどんざは、仕事を終えたお爺さんが家に帰ってくつろいでいる時に羽織っていたもので、二枚の生地を組み合わせて作られているため重さはありませんが、丈夫で暖かいとのこと。

明子さんは手の込んだ作りであるため、どういう想いで作られたのかを考えると感慨深いものがあり、このどんざをジャケット風に仕立て直して、現在も愛用しているそうです。



どんざのジャケットや産着など（その二）

国後島出身の佐藤 明子さん



この産着は、当時十八歳だった文さんが長男の正彦さんのために作ったもので産着全体には松の絵が描かれていて、袖は無双袖、背中には手づくりで作られた布袋様のお守りが縫い付けられており、正彦さんの健やかな成長を祈る文さんの気持ちが届わってくると明子さんはおっしゃっています。

丸帯は、苔色、金色のおりが入ったものですが、文さんが結婚式を挙げた時に締めていた帯ではないかとのこと。お爺さんは、文さんにまつわるこれらの品々を生涯大事に保管されていたそうで、明子さんはお爺さんの文さんへの強い愛情を感じると話されていました。

このほかにも、文さんが書かれたものと思われる木札があります。その木札には「北海道千島国々後郡泊村西通一番地 公立国後尋常小学校 石田正彦」と書かれていて、お父さんの正彦さんが小学校に上がる時に持たされたものと聞いているそうです。



さらに、お爺さんが作ったと思われるこげ茶色の木の葛籠（つづら）箱があります。蓋の裏には「日露戦争を勝った記念に」と書かれています（日露戦争が終わったのは明治三十八年）。明子さんは、キャスターを取り付け、現在も使用しているそうです。

これらの物については今も大切な思い出の品として保管されています。

